デンバーでの比較文化体験
誰の視点から？ どのような立場から？

高瀬 裕子

二〇〇九年の新年期、アメリカ合衆国コロラド州デンバーを訪問した。この訪問の目的は、四月一日から四日まで開催されたSRCD (Society for Research in Child Development)に出席し、私たちが進めている比較文化研究の成果の一端を発表することであった。

急激な社会・経済的変化の渦中にいる日本の親子の実情を知ろうとすれば、日本だけを見ていたのではない。日本人はどのようにして日本人になっていくのだろうか？この素朴な疑問を追究するため、私たちは日本、韓国そして中国の親を対象として、親の社会化方略の模索を始めた（社会化とはその社会の成員としての一定の社会的行動様式を習得していく過程をさし、そのための手立てを方略という。対象とした子どもの年齢の幅は広く、三歳から小学校三年生
までであった。さらに、子ども同士の関係をとらえるために、幼稚園・保育所の保育者や小学校の教師にも評定を依頼した。このようなペア・データを収集する手法を採った理由は、社会化のプロセスを、家庭だけでなく就学前施設や小学校でもを通じて連続的に検討しているからである。親の社会化方略に関する分析結果の概要を紹介してみよう。東アジア三か国を比較すると、統計的に有意な文化差は認められぬものの、「関係の維持」方略と「自己への関心」方略は通文化的に使われていた。つまり、父親たちは子どもとの関係を重視しつつ、親の権威によって方向づけていくしつけ方略をよくつかうのが高かった。また日本の親の評定平均値は総合的に高く、中国の親のそれは高い傾向にあった。

今回の分析に基づいて三か国の社会化方略の特徴を整理すると、次のようになる。日本の親は「関係の維持」を、韓国の親は「自己への関心」を重視していた。私たちの仮説は、中国の結果の一部を除けば、おおむね支持されたことになる。社会経済的変動による価値観の変化、少子化やひどい子政策の影響、学校や教育への関心の高まりなど、アジアをも巻き込んだグローバルな社会変動の波を痛感し
た次第である。以上は第一段階の結果であって、さらに詳細な分析を進めるつもりである。

さて、第二の目的はデンバー美術館訪問であった。同美術館のネイティブ・インディアンの美術コレクションは、世界最大規模を誇り、合衆国とカナダすべての五十部族から収集された約二万点が所蔵されている。プエブロ・インディアンのセラミック、ナヴァホ・インディアンの織物、ヌースウェスト・インディアンのコースト彫刻（トーテムポールなど）、籠細工やピーズ細工、油絵などの多様な芸術的伝統に触れることができる。見学者の理解を助けるために、展示方法にも工夫が凝らされていた。ナヴァホの砂絵のように、子どもたちの興味や関心を喚起する参加型のコーナーも設けられていた。私が訪問したのは土曜日で、大勢の親子連れが楽しそうに取り組んでいた。

私は、インディアンの生活ぶりをイメージさせる日用品や衣服類、美術工芸品などを夢中になって見た。ベスト類に施された繊細でていねいな刺繍、日本の伝統模様を彷彿とさせる壷の幾何学模様、丹念に織り込まれたラグ類が醸し出す一気呵成で、子どもたちの興味や関心を喚起する参加型のコーナーもあった。子どもたちはいつも親と一緒に移動することができた。彼らは子どもたちが中央部が革ひもで縫まれ、周囲には繊細な彩色が施されている。この道具の魅力は、子どもたちがその中に寝かせ、背負って運ぶ革製のクレードルボード（Craddle board）に見せることができる。